

# 東京慈恵会医科大学看護学科生の アメリカ研修

URTA代表 海野 ゆたか

Yutaka Unno

## はじめに

日本では、看護大学の新設と増設が進んでいる。多くの看護大学で、国際医療や国際看護のカリキュラムに人気が集まっているという。そして、海外の病院や施設で看護研修を受ける学生も年々増えている。しかしながら、東京慈恵会医科大看護学科学生のワシントンにおける臨床看護研修（以降、看護研修）ほど看護ケアの奥まで踏みこんでいるのは非常に稀なケースと言えよう。このユニークな研修とともに、今年の研修生たちが行った自発的な支援活動も紹介してみたい。

## 慈恵医大看護学科生によるプロビデンス病院での研修

ワシントン DC の北東地区にプロビデンス病院がある。カソリック系の医療団体「Ascension Health」が運営する医療機関で、1860年代初期に16代目大統領リンカーンの承認を得て開設されたという古い歴史を持つ総合病院だ。ここは、ワシントン DC の市民病院的な医療機関として、経済的に恵まれず、社会的な力も持たない地域住民に医療ケアの提供をしている。

毎年3月になると、慈恵医大看護学科の学生たちがプロビデンス病院にやってくる。病院が主催する臨床看護研修を受けるためである。今年で7回目となる看護研修は、3月14日から27日までの2週間行われた。今年も教師に同行された9名の学生が、例年通り、現場の看護師について臨床での看護実践に励んだ。

朝の8時30分から始まる研修に、病院から遠い家庭の学生は、7時の電車に乗って出発だ。研修は、病院のオリエンテーション、看護に関する講義、そして病院内の施設と設備などの見学から始まる。この日、学生たちが希望する病棟の医療部門と「シャドーイング」を決める。翌日からは、病院に到着するとアメリカ人の看護師が着用するスクラブというユニホームに着替え、聴診器を胸に掛けた姿で朝の実務指導を受けたのち、それぞれが希望した医療部門に分かれていく。外科系と内科系の病棟、救急部、産婦人科、新生児、バリアティブケア、専門看護師、ナースプラクティショナー、といった具合に、臨床領域で体験実習をするのだ。

臨床では、看護師について行われる「シャドーイング」の方法が採られ、各病室の患者ケアをつぶさに見て回る。患者に声をかけたり、電子辞書を片手に会話を交わす。現場の看護師に援助の手を貸すこともある。外科を回る学生たちは、手術室に入って

の見学も行う。産婦人科の学生は、時に出産に立ち会うこともある。この「シャドーイング」は、一人ひとりが体験する場所を交代しながら行われていく。そして、一日の終わりは「ポストカンファレンス」。その日の体験と学習から生じた学生たちの疑問に答え、問題点を理解させ、解決していく指導である。

毎年、アメリカの看護師たちと2週間近くをともにする学生たちは、驚きの目を見張る。アメリカの看護師たちが楽しそうに仕事をしていること。患者との会話も明るく、オープンな態度であること。看護師の役割責任が明白であること。そしてケアの判断にも自主性があることだ。学生たちにとっては、むしろ実習に近いカリキュラムの研修となっている。だからこそ、アメリカの看護医療の現場を観察するだけでなく、日米の看護ケアの実践の相違と共通点を、自分の目で見て、肌で感じることができるのである。ほぼ全員が、医療や看護についてカルチャー・ショックを受けると言う。

### 看護研修についての学生評価

慈恵医大では、研修後に学生からアンケートを取っている。2010年度研修生の調査によると、学生たちの研修目的の達成度は平均で90%、満足度も平均90%という高い数値を示した。さらに、研修から学んだ点は、「医療や看護、文化の違いを学べた」と、自分の意識で「より良い看護を考えていくきっかけとなった」が57%。「看護においても、日常においても、前向きに考えることの大切さ、重要さを学んだ」が43%。学生たちは、病院でのオリエンテーション、看護研修講義、「シャドーイング」の時に通訳の補助があるとはいえ、現場研修中は英語との格闘である。現場看護師の指導を受け、ノートをとり、そして意見発表をしなければならないからだ。朝は早くからホームステイ宅を出て、午後の3時30分まで続く研修。夕方帰宅すると、ホストファミリーを手伝い、夕食後には宿題もある。決して楽な2週間ではない。だから、学生たちが自分の努力・頑張りに対する評価は、97%という高い数字を出すのであろう。2週間という短い研修であっても、大きなインパクトを受けて帰国していることがわかる。

研修の効果を示すもう一つの例をあげよう。既に6年の経験を持つ中堅看護師として日本で働いている第一回目の研修学生たちの一人は、アメリカへの留学を決意している。アメリカで専門看護師のライセンスを取りたいと、今まさに留学への準備をしているところである。

### プロビデンス病院での看護研修開始の経緯

どのような経緯で慈恵医科大とプロビデンス病院との協力関係が出来上がったのだろうか。実は、この病院に住吉蝶子先生という日本人のスタッフがいる。同病院の国際医療コンサルタント部門で、研修企画を担当する彼女は、長年にわたって日本で看護教育の指導に当たっている。そして2004年の4月から、慈恵医大総合医学研究センター・医療教育研究部の客員教授を兼任したことから始まった。

住吉先生が慈恵医科大看護学科で教鞭を執り始めて1年後の2005年3月。同大看護学科の学生5人が、春休みを利用してプロビデンス病院を訪れた。アメリカの看護を視察したいという要望を持って、先生を頼ってきたのだ。学生たちが自ら計画を立て、お金を工面し、自発的に実行したのである。新学期が始まり、大学に戻った住吉先生は、学生たちの自主研修を学長に報告した。彼女らの積極的な行動と看護研修の有益性を評価した大学では、看護学科国際交流委員会によるパイロット・プログラムとして、「プロビデンス病院内看護学生臨床研修」の実施を決定。そして、プロビデンス病院副院長、慈恵医大看護学科長、住吉先生の三者が協議して看護研修実施の契約が結ばれた。

2006年の春休み、当時、看護学科の大石杉乃准教授が、プログラムの担当者として9名の学生を引率してきた。学生たちは、二人一組でアメリカ人家庭にホームステイして病院に通った。アメリカの臨床看護を学ぶだけでなく、アメリカ社会と文化の学習に役立つよう、そしてアメリカ人の家庭生活をも体験できるようにと考慮したからである。大石先生は、学生たちが病院でもホームステイ先においても、慈恵医科大学生としての良識と節度を持って最善の努力をするように指導し続けた。その指導振りには、毎日使用する電車の中のマナーにも注がれた。学生たちも、大石先生や住吉先生の期待に応じて一生懸命2週間の研修を頑張った。

ワシントン到着の翌日に「生活オリエンテーション」が行われる。電車やバスの利用法、危険な地区と安全な地区の確認、買い物や観光のできる場所、そして研修が始まるプロビデンス病院を視察する。最後は、全員が病院で解散。帰宅は各自の自由行動。グループで行動するとはいえ、初めての土地で、慣れない交通機関を利用して家路に着くのだ。大石先生の発案で、学生たちが「自分の自覚と責任を持って研修に参加する」という意識を高めさせるためであった。



生活オリエンテーション

住吉先生は、慈恵医大の教室で顔見知りの学生たちを、今度はワシントンのプロビデンス病院で迎える。日米の文化と医療システムの相違を通して、アメリカで実践されている看護ケアの真髄に触れてほしいと願う先生は、いつも学生たちに次の点を期待する。「看護研修に参加することで、様々な状況をどのように感じ、どのように行動するか、という自身の感じ方と反応の仕方を認識してもらいたいです。そして、自分と異なる人々を受入れられる自分をつくってほしいのです」。この自己認識こそが、

看護師としての感受性を高めるために必要なのだと強調する。

## 2011年の看護研修

今回の学生たちは、これまでの研修生とは大きく異なる体験をした。それは、震災支援活動である。大災害直後にワシントンへやってきた彼女たちは、病院やホストファミリーの誰からも、被災者を気遣う、励ましの言葉を受けた。日本の見ず知らずの人に寄せられる温かいメッセージが、看護を志す彼女たちの心に火をともしたのである。この自発的活動の記録を特記しておきたい。

三陸沖の大地震と津波が東日本を襲ったのは、学生たちが日本を出発する2日前。被災者の受入れも考えられる慈恵医大病院では、看護研修そのものをキャンセルすべきかどうか、という意見が出た。医療手当てに必要な被災者が運ばれてきた時には、一人でも多くの看護師とその要員を確保しなければならないからだ。慈恵医大看護学科に入学した時から研修への参加を楽しみにしてきた学生たちは、不安な気持ちに駆られた。今回の同行教員となった藤野彰子先生も、国全体が混乱の状況にある中で、どのように判断したらよいのか迷った。最終的な判断を仰ごうと学長に電話を入れた。一瞬のためらいもなく学長が言った。「研修を楽しみにしてきた学生たちの夢を破ってはいけない。また、ワシントンで待ち受けているホストファミリーたちの用意も無にしてはいけない。だから、予定通りに研修を実施しましょう」と。学長と学科長の英断で研修の実施が決まった。

藤野先生、若澤先生、そして9名の学生たちは、出発の1日前に成田空港に集合した。混乱する当日の交通事情を考えたからだ。すでに混乱している首都圏の電車やバスを6時間以上も乗り継いで到着した学生もいる。空港もまた大混雑であった。そして翌13日、再開したユナイテッド便が1時間以上の遅れで成田を出発。この遅れがシカゴでの乗り換え便に影響する。予定の便に間に合わなかったのだ。そのため一行は、ワシントン便の座席キャンセル待ちをしながら、三々五々の到着となった。結局、最後の学生二名がダレス空港に降り立ったのは夜の10時少し前。東京を出て45時間の長旅であった。

## 学生による乾電池支援の呼びかけ

3月15日からプロビデンス病院内での看護研修が始まった。研修は順調に進み、2週目に入った22日、学生たちがエミー・フリードマン病院長とマット・リューカシアック副院長を訪ねた。「私たちが日本の方々に何かしてあげられることはありますか？」という質問を受けると、即座に「乾電池の支援をして欲しいのです」と答える。なぜなら、大学から届く連絡で、慈恵の大学病院や日本の医療施設、医療救護班が医療機器に使う乾電池を渴望していること、店頭からも乾電池が消えつつあるというニュースを聞いていたからだ。日本の病院や施設の窮状を知った両医院長は、乾電池支

援の呼びかけに協力を約束すると、全職員と従業員に向けて医療器具・機材用の DC と AA 乾電池の寄付依頼を伝達してくれた。

病院での最後の 24 日。午前中の研修を終えた学生たちは、「乾電池支援のお願い」に立ち上がった。寄付箱を前にした学生たちが、三人交代で病院内カフェテリアの入り口に立ち並ぶ。そして行き交う人に向かって乾電池の寄付を呼びかけた。病院の職員や従業員だけでなく、患者さんたちからも乾電池が持ち寄られる。学生たちの支援活動を初めて知った一般患者の中には、わざわざ乾電池を買いに行きそれを寄付してくれる人もいる。乾電池の用意ができない人からは、「これで乾電池を購入してください」と言って、現金を寄付してくれた。誰もが日本の被災者を思いやる優しい言葉を添えてくれる。そして 1 時間半という短い時間の呼びかけで、ファイル収納の段ボール箱 3 箱に溢れるばかりの乾電池と現金 300 ドル余が集まった。



慈恵医大看護学生による電池支援のお願い

毎日報道される日本の大災害と被災者のニュースに、アメリカ人の多くが心を痛めている。病院の職員たちも同じだ。誰もが日本のために何かをしたいという気持ちを持ち、医療者として何ができるかを模索していたところだと言う。医療機器に乾電池は非常に重要なもの。「日本の医療者が必要としていることを手助けできれば、私たちもほっと胸をなでおろす気持ちになれます」と喜ぶ。集まった善意の乾電池は、病院から慈恵医大の学長宛に送られる。慈恵医大には、福島医大と福島県医師会からの救護要請が届いている。これらの要請先のほか、慈恵医大が持つ 3 つの分院、近隣の医療施設、福祉施設などに乾電池が分配されるそうだ。「バッテリーは、現代の医療器具に必要欠くべからざるものです。医療の実践に当たる人にしか気づかない品物なのかもしれません」と住吉先生が説明をする。

予想以上にたくさんの乾電池が寄付されて、学生たちから驚きと喜びの声が上がった。伊藤百合野さんは、「日本で売っている乾電池のパックには、せいぜい 2 本か 3

本が入っているだけ。アメリカでも同じだろうと考えていたら、こちらのパックには10本、12本、20本入りと大きなパック。そんなパック入り電池を2つも3つも寄付して下さり、びっくりしました」と言う。森田あかねさんは、「私は、今朝、手術室に入りました。手術室のスタッフが、私たちの支援活動に協力して乾電池を持ち寄ってくれただけでなく、さらにみんながお金を集めて寄付してくれました。みんなの優しさに涙が溢れました」。「寄付に協力してくれただけでなく、誰もが気づ知らずの被災者を心配してくれ、『負けないで頑張るように伝えてね』とか『アメリカからもみんなのことを見守っているからね』という励ましのメッセージを添えてくれるのには感動しました」と話すのは久保田友美さんと金丸由佳さん。学生と一緒に支援活動に立った藤野先生も、「日本の被災者の困窮を思う温かい言葉に、胸が詰まる思いでした」と感激した。

### おわりに

慈恵医科大の看護学生たちが参加する臨床での看護体験は、他の病院では経験できないユニークで実践的なものである。さらに、今年の学生たちは、自分たちの考えと決断で乾電池支援の呼びかけを実践した。病院で出会った多くの人を通して、医療ケアのシステムや技術の相違を勉強しただけでなく、アメリカ人の優しさと人情に直接触れる機会も得た。講義やテキストからは得がたい体験をしたのである。住吉先生の表現を借りると、国際看護や国際医療とは、自分たちがよその国に出て行って支援するものだけではなく、自分たちの国も医療もグローバルの中に存在する一国であることを認識したはずだ。期せずして「Global Healthcare」の真髓を肌で感じ、理解した彼女たちは、今回の体験をこれからのキャリアに反映させていくことと確信する。